はじめに

杉澤経子

杉澤　経子　皆様、こんにちは。今日はここ上田市で1日有意義な時間を過ごしていきたいと思います。私は東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの杉澤と申します。今日の司会を務めさせていただきます、よろしくお願いいたします。

現在の日本は、多言語・多文化化していく中でさまざまな課題が出てきています。本センターでは、そうした課題を一元的に切り刻んでいくのではなくて、教育、医療、経済というようなさまざまな分野の方たちに参加していただき、包括的に課題を捉え、その解決に取り組んでいこうということで、協働実践研究プログラムを展開しています。

5つの班に分かれてテーマを設定し研究を進めていますが、その中の1つが、この上田市の皆さんとの協働実践研究班です。今日は、母袋市長はじめ教育委員会、それから市民課の方たちが参加くださっていますが、お手元の配布資料にもございますように、本日のプレフォーラムのテーマは「共生の地域づくりに向けて」として、2年間の研究活動の成果を、新たなプログラムの構築に向けて発表していこうという内容になっています。上田市で今どういう取り組みがされているか、研究活動の報告や成果の発表に対して、関係者からコメントを、さらに今日来てくださっている皆様からも活発なご意見をいただきたいと思います。ぜひ積極的にご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。

多言語・多文化教育研究センターでは、11月に開催する全国フォーラムに向けて、各地でプレフォーラム全5回開催していきます。今日のプレフォーラムを

踏まえて、全国フォーラムの分科会では、この上田市での研究の最終となるまとめの発表をしていきます。今日お越しいただいた方は、ぜひこの全国フォーラムにもご参加いただければ幸いです。

それでは早速協働実践研究「阿部・井上班」プレフォーラムを始めます。このプレフォーラムは上田市と本センターが協働で開催しています。主催者といたしまして、最初に母袋創一上田市長より、ご挨拶を申し上げたいと思います。

母袋　創一　皆さん、ようこそ上田へお越しくださいました。上田市長の母袋です。連休最後の日に、やや硬い話ではありますが、今後の日本を考えたときにどうしても避けて通れないテーマで、共生社会づくりに向けて外国人とどうしていったらいいかを趣旨にフォーラムを始めます。私ども上田市も東京外国語大学の研究を支援しておりまして、今日は共催ということでさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、昨日「ブラジル田舎祭り」と称しまして、こちらで人出が 2,000 人とも 3,000 人とも思われる盛大なイベントが開かれました。私も毎年参加していますが、主催者のバイタリティーとイベントに対する思い入れを強く感じているところです。県内におきまして、ブラジルという特定の国の祭りとして行われるものでは、最大のものであるようです。このお祭りは今年で 10 年目を迎えたということと、併せて皆様にもご案内の通り、日本からブラジルへの移民 100 周年に当たる年ということで、節目のイベントとなりました。移民の歴史の写真展示など、盛りだくさんの内容でもございました。この写真の展示につきましては、プレフォーラム開催に合わせまして、この 1 階の展示室で本日も行われています。

今回この協働実践研究のプレフォーラムを上田市で行うことになりましたのは、3 年ほど前に東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが実施する在日外国人のための教材開発プロジェクトで、ポルトガル語教材を作成するにあたって協力を依頼されたことがきっかけでした。このプロジェクトのスポンサーが三井物産であるとお聞きし、かつて私が 15 年ほどサラリーマンとして勤めていた会社だったという、そんな縁も感じながら、快くご協力を申し出てやってまいりました。

上田市における外国人に関する施策は、試行錯誤と言っては語弊があるかもしれませんが、実際にはやはりそのような状況で、いろいろ考えながら推進してまいりました。市民団体と行政に加えて企業も参加する「上田市外国籍市民支援会議」というものを設立し、地域全体で外国人との共生に取り組む体制ができたと

母袋創一

ころです。これらの条件がそろっていたことで、阿部・井上班の皆さんによってこの上田市が選定されたのではないか、このようにも思っています。

今回研究班の皆様との関係ができたことによって、担当の職員にも大変大きな力、またアドバイスを賜ってまいりました。例えば日本語指導者の養成講座開講の際は、カリキュラムや講師の派遣について、別の研究班である「野山班」にもご協力いただくなど、多文化共生の取り組みについて多大な援助をいただきました。この場をお借りし、あらためて感謝申し上げる次第です。今後につきましても、お互いよりよい関係を保っていければと願っております。

ところで、上田市は長野県内の市町村の中でも最も外国人登録者が多い市です。4 市町村によって合併をした平成 18 年の前半までは、急激な勢いでこの登録者数が伸びていました。上田地域の企業は製造業が多く、工業製品出荷高では、長野、松本を抜き、県内で 2 番目の出荷額を誇っています。それだけに、企業においても労働力を必要としており、今はピークに比して外国人の労働者、在籍者がやや減少に転じていますが、現在約 5,300 人余の皆様が住んでおられます。

確かに景気の動向、企業の戦略による生産ラインの縮小などの影響で、外国人労働者の雇用状況の不安定さを表す一面も見られます。また一方で国におきましては、当市も参加しています外国人集住都市会議の強い提言もありまして、ようやく来年には外国人登録制度の改善が図られるいう話もあり、一定の前進が見られているものと感じています。

私の予想では、この企業での労働力ということのみならず、今後は福祉の現場、あるいは医療の現場での外国人の受け入れというものが課題になっていくだろうと思います。上田市としましても、昨年策定いたしました新市の第一次総合計画の中におきまして、外国籍市民を支援し多文化共生社会を目指すと明確にうたいました。未来を見据えながらこの多文化共生のまちづくりを進めていきたいと考えています。今日は主催とさせていただきましたが、私どもも大いに学ばせていただき、今後の参考にしたいと思っています。

最後になりますが、本日のプレフォーラム開催に当たりまして、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの北脇センター長をはじめとするスタッフならびに特任研究員の皆様にご協力いただいたことに感謝申し上げます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

杉澤　ありがとうございました。続きまして、多言語・多文化教育研究センター長の北脇保之からご挨拶申し上げます。

北脇　保之　皆様、こんにちは。東京外国語大学の北脇です。今日は協働実践研究のプレフォーラムに全国各地からご参加いただきまして、誠にありがとうございます。そして一緒にこの協働実践研究に取り組んでいただいている上田市の皆さんに、心からお礼を申し上げます。

私ども多言語･多文化教育研究センターの活動と上田市とのかかわりについて、今、母袋市長からお話をいただきました。お話にもありました通り、3 年前に私どものセンターができまして、そのときに外国人児童、特にブラジル人児童向けの教材開発を、三井物産株式会社の支援を得て 2006 年に開始しました。外国につながりのある子どもたちの教育を、各地域の現場の先生方や学習支援指導者の皆さんが大変苦労をしながら一生懸命取り組んでいらっしゃる。私どもも少しでもお手伝いをしたいということで、よい教材を作ってそれをインターネット上で無料で公開し、誰にでも使っていただけるようにしようと取り組みを始めたわけです。

北脇保之

その際、それぞれの現場の皆さんのご意見をお聞きし、作った教材について評価をしていただく。また同時にその教材を普及するという役目を担っていただこうと、全国の中で 3 地域の方々にご協力をお願いしました。そのうちの 1 つがこの上田市でした。そのほかは群馬県の太田市・大泉町、静岡県浜松市です。この 3 地域の皆さんのご協力をいただきながら教材開発をしてまいりまして、すでに漢字教材、それから足し算、引き算、掛け算、割り算の教材ができました。さらに今、分数教材を作っているところです。

このプロジェクトにつきましては、上田市の市教育部の皆様、教育委員会、さらに各学校の先生方に幅広くご協力をいただいて現在に至っています。そういう中で、協働実践研究につきましても、上田市と私どもとの教材開発の協力関係を活かして、ご協力をいただきながら進めています。その成果の一部を、今日はプレフォーラムということでご紹介し、皆さんと一緒になって考えていこうということです。

まず、この協働実践研究の趣旨を申し上げます。とかく大学が行う研究といいますと、社会学的な調査をお願いして、その調査結果をまとめて大学側の研究発

表に使う。それで終わってしまうというので、協力した地域やまた組織や施設の皆さんにとっては何も得るものがない、そのままに終わってしまうということがあります。そういうことではなく、そのようないわゆる収奪型の研究ということではなくて、地域の皆さん、いろいろな関係者の方と大学の研究者が一緒になって、またその研究者も単に大学にとどまらず、経済分野や市民活動に従事されている方など、幅広いチームをつくって地域の皆さんと一緒に課題に取り組む。その中で得られた知見を研究という形で一般化していく、そしてそれを皆さんにまた還元していく。このようなねらいで、協働実践研究として取り組んでいます。

そうした趣旨も、ぜひ今日のプレフォーラムの中で本当に現実のものとしていきたいと思っていますので、皆様のご協力をお願いいたします。実は、私も去年まで静岡県浜松市の市長を2期8年務めてまいりました。浜松市というのは、今、人口82万人の政令指定都市になっているのですが、外国人が3万人ほどいまして、そのうちの約6割がブラジル人で、その数は約2万人近くに達しています。従って、浜松市では全国でもブラジル人が一番多いまちです。私はまず市長としての方針として、外国人であってもそれは浜松市民であり、日本人の市民であることと同じだという認識をまずしなければいけないということを打ち出しておりました。

それと同時に、外国人の皆さんが、その地域の経済にとってなくてはならない存在として大きな社会貢献をしていることを、すべての市民がはっきり認識するべきだということも申し上げてまいりました。そうした中で、とかく外国人のことになりますと文化や習慣の違いによって、ごみの出し方を守らないだとか、地域での摩擦とかトラブルとか、そういうことばかりがクローズアップされるきらいがありますが、そういうマイナス面は極力小さくしていく努力を、自治体をはじめとしてみんなでやっていこうということです。むしろ、外国から来られた方が持っている固有の文化、そういったものを発揮してもらうことで逆に地域を豊かにしていく、そういうプラス面をもっと重視していこうではないかと、そのような考えで市政を進めてまいりました。

ここ上田市も、私自身が抱えていたことと方向を同じくして取り組んでいると感じています。外国から来られた方と日本に元から住んでいる私どもが共に1つの社会をつくっていくには、それぞれの分野、それぞれの立場で取り組んでいくことが必要です。その点では国もやるべきことをやらなければならないし、地方自治体にも大きな役割がある。また市民社会としても取り組んでいかなければならない。自治体というのは地域においてその地域の皆さんがつくり上げていくも

のです。外国人の参政権の問題はまだこれからの課題ですが、それぞれの市民に選挙権があって、その自治体のシステム、運営にかかわることができる。そしてその地域全体をどうしていくか公共的な立場で物事を進めていく。そういうための組織として、自治体の役割は非常に大きいと思います。

自治体が積極的になることによって、教育、福祉、雇用などいろいろな分野の問題全体に取り組んでいくことができる。そういう点では、この上田市の取り組みは非常に意義深いものだと思っています。私ども多言語・多文化教育研究センターとしても、決して一過性のものではなく、この上田における共生の地域づくりが着実に進んでいくよう、お役に立てるように今後も一緒になって取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。